読後の〝酔い〟も楽しい

著者のことば

■マリーについての本当の話

ジャン＝フィリップ・トゥーサンさん

おいしいワインのような小説。ぐいぐい読み進めていると、頭はぐるぐる、足元はふらふら……。読み終えれば、心地よい余韻が待っている。「魔性の作家」はどんな人かと思いきや、物静かで憂いをたたえていた。1985年のデビュー作「浴室」以来、本作に先立つ7本の小説すべてに邦訳があり、親日家である。

パリの暑苦しい夜。マリーは自宅で裕福な実業家と交わっていたが、彼は心臓まひを起こして意識を失う。マリーの元彼氏の「ぼく」は、電話で呼び出される。マリー宅に駆けつけると、実業家は救急車で運ばれていくところだった。

気ままに視点がぶれる。語り手の「ぼく」に見えるはずのない光景が細密に描き込まれ、読者を幻惑する。「夢」を見ているかのようだ。「私は物語そのものではなく、読者を小説世界に引き込むことに強い関心があります。いろいろな仕掛けを施しました」と、フランス現代文学界で重きを成す氏はほほ笑む。

第2部では、マリーたちが東京のホテルから成田空港まで移動し、その貨物倉庫一帯で競走馬の大捕物を演じる。ここが実に読ませる。夢のはずなのに、音が聞こえ、臭いが漂っているのだ。「これまで書いた小説の中で、最も取材しました。ネットを駆使し、写真も集めた。馬の輸送方法はエールフランスのパイロットに聞き取りをしました。ただ、シーンそのものは私の空想の産物です」。貨物専用飛行機の内部など、映像を見るかのようだ。

氏は映画監督でもある。頭の中の映像を文字に書き留めたのが小説なのでしょう？　「逆です。映像は常に言葉から来る。脳内で形を成していないイメージを、書くことによって形にするのです」ときっぱり。

さて、マリーと「ぼく」は、再び抱き合う日を迎えるのだろうか。品のあるエロチシズムとユーモアに満ちた夢の先に見えてくるのは、読む者を勇気づけてくれる命の輝きだ。二人はたびたび事故や事件に見舞われるが、人生を投げ出しはしない。事態をさっぱりと割り切り、その根っこに生命力があふれる。こうなれば読後の〝二日酔い〟もまた楽し、なわけないか。

文と写真　鶴谷真

（野崎歓訳　講談社・1890円）